

爪かき阿弥陀



爪書き阿弥陀

JR常磐線の高浜駅から徒歩5分、車の往來の頻繁な狭く古い街道沿いに「爪書き阿弥陀」はある。

その昔、この辺りまで霞ヶ浦が広がり、国府の外港として、また、鹿島参詣の港として賑わったという。現在でも高台から見渡すと田園の広がり霞ヶ浦へと続いており、当時の面影を偲ばせる。

ここは、元天台宗の寺であったが、現在は廃寺となった。その名残に参道脇には「高龍山福聚院西光寺千手観音菩薩・親鸞聖人爪書阿弥陀如来」と刻まれた古い石柱が立っている。奥に進むと二件四面の小さなお堂があり、中に親鸞聖人が石に爪でかいたと伝えられている「爪かき阿弥陀像」が安置され、地元の人びとの手によって守られている。

この爪かき阿弥陀如来像には古くから地元で言い伝えられてきた伝説があったが、昭和60年の本堂修復工事の際に堂内から縁起が記された巻物が見つかり、近くにある酒造会社の社長さんによって試訳され、言い伝えとほぼ同じであったことが確認されたということだ。

それは、親鸞聖人が稲田の草庵にご在留の時、一切経のある鹿島まで教典をご覧になるため、港のあった、この高浜をたびたび訪れていた。そして、このお堂にさしかかった時に腫れ物で苦しんでいる男と出会い、ふびんに思った聖人が、その苦しみ

を少しでも取り除こうと語りかけた。しかし、病人は、つまらぬ僧侶のたわごとのような説教を聞いてもしょうがないと応えたが、聖人は穏やかに、お念仏の教えを説き、お念仏を称え続けられた。すると不思議にも病は次第に薄れ、ついには腫れ物がきれいに治った。驚いた男は聖人に詫言、小麦の焼き餅を作りもてなし、船着き場まで見送った。そして、この病の苦しみは除かれたが、未来に起こるであろう苦しみをも助けて欲しいと、涙ながらに願った。聖人は庭の石に阿弥陀さまを残してきたから、これからは阿弥陀如来の本願に教えを聞き、南無阿弥陀仏の名号を称えるよう言い残し、船は出航した。男が家に戻ると言われた通り、庭石に阿弥陀如来の姿が刻まれていた。それから朝夕お参りし、ついには聖人の弟子となり、常願房じょうがんぼうと名を改めたという。

2003年現在、地元では、毎年7月14日に古事を偲び、小麦の焼き餅を供え念仏する習慣が伝えられているそうである。